

日本中東学会ニューズレター

JAMES
NEWSLETTER



No.163
2021/7/31

目 次

新会長挨拶.....	1
理事会・総会報告.....	3
第37回年次大会報告.....	12
第8回日本中東学会奨励賞の選考結果.....	25
第38回年次大会の開催について.....	25
『日本中東学会 (AJAMES)』編集委員会報告.....	25
寄贈図書.....	26
会員の異動.....	26
連絡先をご存じないですか.....	28
事務局より.....	28
編集後記.....	28

新会長挨拶

保坂修司

このたび日本中東学会の会長を拝命しました保坂修司と申します。本日は総会にご参加いただき、どうもありがとうございます。おかげさまで無事、総会を終えることができそうです。参加いただいた皆さまには厚く御礼申し上げます。

今回、皆さまにご挨拶をするにあたって、あらためて日本中東学会の歴史を調べて

みました。1985年の学会発足時の梅棹忠夫初代会長以来、私を含め19代、14人の会長がおります。歴代会長と比較して、私が会長となったことに何らかの意味があるとするならば、それは、私が、大学ではなく、はじめてのシンクタンク出身者であるという点であろうと思います。

中東研究が大学を中心とするアカデミアに引っ張られてきたのはいうまでもありません。しかし、同時に、エネルギーや外交、治安、人権等の視点から、政府機関・民間企業、ジャーナリズム、NGOなどに属する幅広い階層によっても支えられました。実際、日本中東学会の会員には、大学人だけでなく、シンクタンクの研究者、外交官やジャーナリスト、そしてビジネスマンやNGO職員、独立研究者などさまざまな人が含まれ、中東研究という絆で結ばれています。

こうした中東研究の裾野の広がりがあるからこそ、大学人以外から日本中東学会の会長が生まれたのではないかと考えております。もちろん、実際には今期理事のなかで私が最年長だったという点が大きいとは思いますが。いずれにせよ、中東研究者のキャリアパスがさらに流動的になり、さまざまな分野でのポスト間の異動が容易になれば、中東研究の幅も深みもさらに拡大するのではないかと期待をしています。

もうひとつ、歴代会長との比較で指摘しておきたいことがあります。私の専門とする地域は、いわゆるペルシア湾と呼ばれる地域で、私自身、公式にはペルシア湾岸地域近現代史を専門とすると述べています。歴代会長は、初代会長を除き、多くがイラクよりも西、エジプトや北アフリカあたりまでを専門とするかたが多く、もちろん、地域横断的な研究をされているかたもおりますが、私のようにペルシア湾沿岸地域を中心に研究するものははじめてだと思えます。

私自身がペルシア湾岸地域に関わりはじめたのはもう30年以上昔のことで、当時はまだこの地域を学術的に研究しようとする人はきわめて少数でした。もちろん、当時から日本は、この地域の石油に依存していましたので、エネルギー安全保障の観点からきわめて重要な地域だったんですが、アカデミズムの注目を集めることはほとんどありませんでした。古代から連綿とつづく豊かな中東文化とは隔絶された沙漠の小国に住む石油成金といったイメージが大半を占めていたと思います。

残念ながらそのイメージを完全に払拭できてはいませんが、それでも近年、大学やシンクタンクでも湾岸研究者が増えてきましたし、積極的に湾岸地域を研究対象としたいという若手も増えてきています。こうした流れも、日本の中東学会の裾野を広げるのに貢献しているといえるでしょう。私のような、ともすれば「マイナーな」地域の研究者が会長となったのも、こうした点での裾野の広がりとは無関係ではないかもしれません。

もう一つ、触れておきたいことがあります。それは、新型コロナウイルス（Covid-19）感染拡大下での中東研究ということです。2020年はじめからの新型コロナウイルスの世界的な蔓延で、留学や出張などで中東にいく機会が大幅に減少してしまいました。また、大学などではキャンパスが閉鎖されるなど、研究そのものが深刻な影響を受けています。日本中東学会の年次大会も昨年・今年とオンラインでの実施になりました。来年はどうなるのか。これはまったく予測不可能といわざるをえません。

この状況で調査研究や留学のために、中東に出張したり、長期滞在したりするのはきわめて困難になっています。これから研究職を目指す人たちにとって受難の時代といえるかもしれません。中東でも新型コロナウイルスが猛威を振るっており、残念ながら短い期間でこの問題が終結するとは思えません。

たしかに現地にいけないというのは研究活動にとって大きな支障ではありますが、同時にこのコロナ禍で新しい研究の動きが出てきた点も指摘しておいていいかもしれません。私自身の研究分野に関しても、この1年だけでもオンラインで参加できる研究会や講演会、シンポジウム数は激増しました。しかも、それらのなかには、従来であれば、現地にいないと絶対に参加できなかったような、欧米や中東諸国で開催されているものも含まれています。

インターネットを利用して、物理的な距離が一気に縮まり、世界中の最新の研究成果を簡単に見たり、聞いたり、またみずから発表したりすることができるようになったわけです。正直なところ、コロナ禍がなければ、これほど急速にオンラインの会議が一般化することはなかったと思います。

今後、コロナ禍が鎮静化して、ふたたび中東にいけるようになれば、オンライン会議の普及とあいまって、中東研究の方法が劇的に発展し、さらに高く、そして深く進化していくのはまちがいないと思います。「禍福は糾える縄の如し」あるいは「人間万事塞翁が馬」ということわざがありますが、われわれは今、苦しい状況から抜け出し、中東研究の新しい地平を切り拓いていく、そんな時期にさしかかっているのではないのでしょうか。

最後にもう一つ、触れておきます。それは中東地域の現状についてです。すでに公開講演会でも触れましたが、現在、中東ではイスラエルとパレスチナの衝突が激化しており、いまだ鎮静化の兆しすら見えません。また、地球温暖化の元凶として化石燃料が槍玉に上がっており、湾岸のレンティア国家群も抜本的な改革を迫られています。それは畢竟わが国のエネルギー安全保障にかかわってくるでしょう。こうした現状で、日本中東学会が、また個々の会員が何をやるべきか、何ができるのか、今、そんな課題を社会から突き付けられているのではないかと感じています。

明日は個人研究発表がごさいます。皆さんの研究がさらに進むことを祈念して、私の挨拶とかえさせていただきます。最後に、この総会に参加いただいた日本中東学会会員の皆さんにあらためて御礼申し上げます。さらに、公開講演会と総会の準備のために頑張ってくれた大会実行委員会の皆さん、第19期理事のみなさん、そして堀抜事務局長を中心とする日本中東学会事務局のかたがたにもこの場を借りて感謝の意を表明したいと思います。どうもありがとうございます。

理事会・総会報告

【2021年度第1回理事会報告】

日時：2021年5月7日（金）18:00～20:00

オンライン開催

出席者：保坂修司、堀抜功二、青山弘之、秋葉淳、岩崎えり奈、江川ひかり、大川真由子、粕谷元、菊地達也、後藤絵美、佐藤健太郎、錦田愛子、森本一夫、福田義昭

欠席者：横田貴之（委任状あり）、末近浩太（委任状あり）、勝沼聡

〔報告事項〕

1. AJAMES 編集について報告と説明があった。
2. 広報事業について、学会 HP、ツイッター、会員メーリングリストでの広報活動、2018 年度以降のウェブ改修終了の報告があった。
3. 第 26 回公開講演会について、コロナ禍を受けて公開講演会と公開シンポジウムを統合して実施したことが報告された。
4. 第 8 回日本中東学会奨励賞の選考結果について報告があった。
5. 第 37 回年次大会準備の進捗状況について報告があった。
6. 第 38 回年次大会開催校について、告知方法について検討中である旨報告があった。

〔審議事項〕

1. 2020 年度事業報告・2020 年度決算を承認した。
2. 2021 年度事業計画・2021 年度予算案を承認した。
3. AJAMES 編集事業計画を承認した。
4. 国際交流事業について、AFMA 開催準備、年次大会にかかる KAMES との連絡調整の方途を審議した。
5. 広報事業計画を承認した。
6. 第 27 回公開講演会企画について審議した。
7. 会員動向について、新規入会申し込みを承認した。
8. 中東学会オンライン総会の進行案を承認した。
9. 監査の内諾者を承認した。
10. 学生会員および会費特例会員の 2021 年度会費の免除を総会で諮ることを承認した。
11. アルバイト謝金の値上げを承認した。
12. 育志賞の推薦候補者を会長に紹介することを承認した。

【2021 年度日本中東学会第 37 回年次総会議事録】

日時：2021 年 5 月 15 日（土）15:00～17:00

会場：オンライン（Zoom ウェビナー特設会場）

出席：当日出席者 54 名、委任状提出 140 名、計 194 名

（会員総数 649 名に対する総会定足数 5 分の 1 [130 名] を満たしたことにより、総会成立）

1. 議長等の選出

松尾昌樹会員の司会により、議長として澤江史子会員、書記として河村有介、臼杵悠両会員、議事録署名人として丸山大介、黒田賢治両会員が選出された。

2. 2020 年度事業報告および決算

下記の通り、2020 年度事業報告、AJAMES 編集委員会活動報告、決算報告、監査報告が行なわれ、全会一致で承認された。

2-1. 事業報告（報告：安田慎 第 18 期事務局長）

- 1) 第 36 回年次大会特別研究集会を、2020 年 8 月 29～30 日に、オンラインで開催した（桜美林大学で開催予定だった年次大会が、コロナ禍で中止となったことへの代替措置）。同研究集会では、8 部会 65 本、企画セッション 3 本の研究報告がなされた。
- 2) 日本中東学会年報（AJAMES）第 36-1 号、第 36-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行うとともに、科学技術振興機構（JST）運営の科学技術情報発信・流通総合システム（J-Stage）においてバックナンバーの公開（第 35 巻 2 号まで）を行った。
- 3) 2020 年 11 月 14 日に第 26 回公開講演会「人類共生と宗教」をオンライン（Virtual OBIRIN 講堂）において開催した。
- 4) ニュースレター和文 3 回（総頁 73 頁）を発行した。第 159 号（8/5、年次大会特集、27 頁）、第 160 号（12/24、32 頁）、第 161 号（3/30、14 頁）。
- 5) 「日本における中東研究文献データベース 1989–2020」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- 6) 学会ウェブサイトの一部改修を行った。
- 7) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- 8) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。
- 9) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ、学会ウェブサイトにおける発信など必要な活動を行った。
- 10) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）への加盟申請を行い、同連絡会に加盟した。
- 11) 会員の増減：2020 年度中には入会者 22 名、退会者 25 名（自主退会 13 名／強制退会 12 名）の異動があった。その結果、2021 年 3 月 31 日現在の会員数は 613 名（正会員 487 名／うち海外在住 13 名；学生会員 126 名／うち海外在住 3 名）となった。

2-2. AJAMES 編集委員会活動報告（報告：横田貴之 第 18 期編集委員長）

- 1) 36-1 号の編集・刊行（2020 年 8 月に発送）：11 本（日本語 5、英語 6）の論文投稿を受け付け、そのうち 8 本（論文 2（日本語）、特集 5（英語：論文 1、研究ノート 4）、書評 1（英語 1））を掲載した。

- 2) 36-2 号の編集・刊行（2021 年 3 月に発送）：12 本（日本語 5、英語 7（英文博論要旨 1 本含む））の論文投稿を受け付け、そのうち 7 本（研究ノート 2（日本語 2）、特集 4（英語：研究ノート 4）、英語博論要旨 1）を掲載した。
- 3) 平成 31 年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））「アジアにおける中東研究のリーディングジャーナルとしての『日本中東学会年報』の国際情報発信強化」（金額 250 万円／年）の交付を受け、AJAMES 出版のために執行した（2021 年度が最終年度）。
- 4) その他
J-Stage（オープンアクセス）にバックナンバー（35-2 号）を公開した（2021 年 3 月）。

2-3. 決算報告（報告：安田慎 第 18 期事務局長）

- 総収入は、27,236,819 円（内訳 前年度繰越金：19,069,185 円、年会費収入：5,064,000 円、その他の収入（AJAMES 販売代金を含む）：3,103,634 円）であった。
- 総支出および次年度繰越金合計額は、27,236,819 円（内訳 事務局費：1,939,603 円、事業費：4,430,943 円、2021 年度への繰越金：20,866,273 円）であった。
- その他、年次大会時託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金の収支についても報告があった。
- 2020 年度の収入のうち、2021 年度以降分の会費収入が減った。これは 2020 年度を持って前納制が廃止されたためである。
- 総会の決議を経て学生会員、会費特別会員の 2020 年度会費の免除を行った。なお、2020 年度会費をすでに納入した対象会員は、その分を 2021 年度会費へと振り替える。
- 事務外注費（国際文献社への事務局業務委託費）が減った。これは、2020 年 10 月から 2021 年 3 月の委託費用を想定していたところ、同社の請求のタイミングの関係で、10 月から 12 月の 3 ヶ月分しか計上しなかったことによる。今後は 1 年ごとに 1 月～12 月までの委託費を計上することになる。
- 2020 年度予算に計上されていた会議費、AJAMES 編集委員会旅費が執行されなかったのは、コロナ禍の対応のため、オンラインで理事会や会議を開催したためである。
- 大会開催費として、年次大会特別基金より 238,593 円を補填した。これは、コロナ禍でのオンライン開催により、参加費を徴収しなかったこと、ウェブの開催システムの構築費用がかかったことによる。

2-4. 監査報告（報告：赤堀雅幸 第 18 期監事）

- 2021 年 4 月 19 日にオンラインにて 2020 年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。
- 報告者の赤堀会員より、他の学会での動向も鑑み、今後は会計監査だけではなく、事業監査も行うように理事会で検討すべきとの監査意見が付された。

3. 第 19 期理事任務分掌の確認および監事選出（報告：堀抜功二 第 19 期事務局長）
下記の通り、理事の任務分掌の報告と監事選出の提案がなされ、全会一致で承認された。

会長：保坂修司、事務局長：堀抜功二（特任理事）、総務：勝沼聡、ニューズレター／書記：青山弘之、国際交流：岩崎えり奈（委員長）、佐藤健太郎、森本一夫、広報：秋葉淳、編集：錦田愛子（編集長）、横田貴之、福田義昭（特任理事）、渉外：菊地達也、企画：粕谷元、後藤絵美、年次大会：大川真由子、末近浩太、財務・会則：江川ひかり。

監事：岩坂将充会員、辻上奈美江会員。

4. 学生会員および会費特例会員の 2021 年度会費の免除について（報告：保坂修司 第 19 期会長）

新型コロナウイルスによる感染症拡大が続くなか、大学院生や非常勤講師の経済的窮状が引き続き問題となっているため、2020 年度に引き、学生会員および会費特例措置の適用を受けている正会員に対する会費免除が下記の通り提案され、全会一致で承認された。

- 2021 年度会費を一律免除する。
- 2021 年度会費をすでに払った対象会員は、それを 2022 年度会費へ振り替える（希望があれば返金にも応じるが、できる限り振替とする）。

5. 2021 年度事業計画および予算

下記の通り、2021 年度事業計画、AJAMES 編集委員会活動計画、予算案が報告され、全会一致で承認された。

5-1. 事業計画（報告：堀抜功二 第 19 期事務局長）

- 1) 第 37 回年次大会を 2021 年 5 月 15 日～16 日に立命館大学（オンライン）において開催する。
- 2) 日本中東学会年報（AJAMES）第 37-1 号（2021 年 7 月）、第 37-2 号（2022 年 1 月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「国際情報発信強化」の助成を受ける。
- 3) 第 27 回公開講演会を 2021 年 10～11 月頃にオンラインで開催する。
- 4) ニューズレターを年数回発行する。
- 5) 学会ウェブサイトの中東研究文献データベースの改修を行う。
- 6) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2021」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- 7) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター、および会員メーリングリストによる広報を行う。

- 8) 海外の関連学会との交流を促進する。
- 9) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- 10) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- 11) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会加盟組織として、参加組織間の相互交流に努める。

5-2. AJAMES 編集委員会活動計画（報告：錦田愛子 第 19 期 AJAMES 編集委員長）

- 1) 37-1 号の編集・刊行：20 本（日本語 13、英語 3、仏語 4）の論文投稿を受け付け、そのうち 7 本（論文 3（日本語）、研究ノート 1（日本語）、資料紹介 1（日本語）、博論要旨 2 本（英語））を掲載する（仏語特集の論文 4 本は 37-2 号に掲載予定）。現在、編集作業中で、7 月に発送する予定である。
- 2) 37-2 号の編集・刊行：6 月 1 日に投稿締切、6 月 2 日から審査作業、1 月刊行予定。
- 3) 2021 年度編集体制：編集委員長：錦田愛子、副編集委員長：横田貴之、福田義昭、編集委員：浜中新吾、斎藤剛、石黒大岳、佐々木紳、山崎和美、吉岡明子、吉村武典、菊地達也、江崎智絵、柏木健一、D.F.Eickelman、R.S.Humphreys、A.K.Rafeq、Kim Joong-Kwan、Song Kyung-Keun の体制で行う。
- 4) 令和 4 年度（2022 年度）科研費研究成果公開促進費（国際情報発信強化）の申請：平成 31 年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））「アジアにおける中東研究のリーディングジャーナルとしての『日本中東学会年報』の国際情報発信強化」（金額 250 万円／年）が今年度末に完了する。
- 5) その他
審査・編集体制の強化（国際情報発信強化）。
J-Stage でのバックナンバーの公開作業（36-1 号以降）。

5-3. 予算報告（報告：堀抜功二 第 19 期事務局長）

- 総収入は 27,894,731 円（内訳 前年度繰越金：20,866,273 円、年会費収入：4,278,395 円、その他の収入（AJAMES 販売代金を含む）：2,750,063 円）を予定している。
- 総支出および次年度繰越金合計額は 27,894,731 円（内訳 事務局費：1,700,000 円、事業費：5,261,097 円、2022 年度への繰越金：20,933,634 円）を予定している。
- その他、年次大会託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金について、それぞれ例年並みの予算を計上している。
- 総会の議決に基づき、学生会員および会費特例会員の 2021 年度会費の免除を行う。なお、2021 年度会費をすでに納入した対象会員は、その分を 2022 年度会費へと振り替える。
- 事務局費のアルバイト謝金（人件費）を対前年度比で 300,000 円減額の 500,000 円で計上している。これは 2020 年度より事務局業務の一部を国際文献社へ外注していること、並びに事務局が置かれた日本エネルギー経済研究所中東研究センターに複

数の中東学会会員がおり、これまでアルバイトに依頼していた事務局の一部業務について分担可能になることを見込んだ措置である。ただし、将来事務局が移転された場合には、人件費は再び増加する余地が生まれる。

- 今年度はコロナ禍による会議のオンライン化が継続するものと考え、理事会開催に必要な会議費や交通費、編集委員会旅費、国際発信強化旅費などを削減した。
- 事務外注費については、2020 年度は国際文献社への業務委託が始まった 2020 年 10 月から約半年分の外注経費が計上されていた。2021 年度は一年間を通じての予算となる。
- 学会ホームページ「中東研究文献データベース」の改修費として 400,000 円を計上する。
- 2020 年度科研費残額の 151,097 円を返納する。

<質疑応答>

(質問 1) 予算支出項目に、人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会 (GEAHSS) の分担金が計上されているので、事業計画にも「人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会加盟組織として、参加組織間の相互交流に努める」という記載が必要なのではないか。

(回答) (堀抜功二事務局長) 事業計画案に上記文言を追加した上で採決を行う。(事業計画修正承認済み)

(質問 2) 2020 年度決算では、収入として国際情報発信助成 (AJAMES) に 250 万円が計上されている一方で、AJAMES 出版のための支出 (編集費、校閲費含む) は 210 万円程度である。国際情報発信助成の未使用額も含めて繰越金として計上されているが、良いのか。

(回答) (安田慎前事務局長) 2020 年度の科研費残額は、2021 年 4 月以降の返金になるので、2020 年度決算に変更はない。2021 年度の決算報告の際に、前年度からの繰越金として処理する必要がある。

6. 第 8 回日本中東学会奨励賞の選考結果について (黒木英充学会奨励賞選考委員長)

7. 会長挨拶 (保坂修司会長)

8. 韓国中東学会会長挨拶 (Dr. Yu Dal Seung 会長)

9. 次年度大会実行委員長挨拶 (大稔哲也委員長)

10. 議事終了につき、司会の松尾昌樹会員から閉会が宣言された。

2020年度決算表

収入	20年度予算	20年度決算
2019年度よりの繰越金	19,069,185	19,069,185
年会費	3,855,940	5,064,000
正・学生会員	3,855,940	5,064,000
2017年度以前分	74,250	95,000
2018年度分	170,000	200,000
2019年度分	516,800	760,000
2020年度分	3,094,890	3,694,000
2021年度以降分	-	315,000
賛助会員	0	0
その他	3,050,063	3,103,634
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成金	2,500,000	2,500,000
利子	63	266
AJAMES販売代金	250,000	293,368
AJAMES掲載料	0	10,000
寄付	300,000	300,000
錯誤振込	0	0
収入合計	25,975,188	27,236,819

(単位: 円)

2021年度への繰越金内訳	20,866,273
郵便振替口座	11,433,486
三井住友銀行口座	9,250,657
科研口座	151,097
現金	31,033

(単位: 円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2019年度よりの繰越金	476,778	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	4	
第36回大会託児所運営費		0
2021年度への繰越金		526,782
合計	526,782	526,782

(単位: 円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2019年度よりの繰越金 (片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,703,613	
利子	66	0
奨励金		0
2021年度への繰越金		1,703,679
合計	1,703,679	1,703,679

(単位: 円)

支出	20年度予算	20年度決算
事務局費	2,318,000	1,939,603
アルバイト謝金	800,000	826,725
通信費	80,000	90,550
消耗品	50,000	27,442
会議費	30,000	0
交通費	50,000	1,340
振込手数料	20,000	16,280
事務局備品費	0	0
事務局移転費	0	0
事務局業務外部委託導入費	688,000	693,000
事務外注費	500,000	176,290
資料保管費	100,000	107,976
錯誤振込返金	-	0
事業費	5,305,000	4,430,943
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	0
AJAMES編集費	300,000	205,200
AJAMES欧文校閲費	300,000	87,933
AJAMES印刷製本費	2,100,000	1,831,588
編集委員会旅費	150,000	0
ウェブサイト改修費	200,000	159,500
広報委員会事業費	500,000	489,220
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	0	0
AJAMES国内発送費	150,000	228,271
AJAMES海外発送費	100,000	66,860
選挙費用	300,000	271,299
J-Stage公開費	200,000	221,012
公開講演会開催費	300,000	215,060
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	150,000
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学協会男女共同参	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	0
支出合計	7,623,000	6,370,546
繰越金	18,352,188	20,866,273
総計	25,975,188	27,236,819

(単位: 円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2019年度よりの繰越金	1,184,074	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	10	
第36回年次大会(特別研究集会)補填金		238,593
振込手数料		550
2021年度への繰越金		994,941
合計	1,234,084	1,234,084

(単位: 円)

2021年度予算案
本会計

収入	20年度予算	21年度予算
2019年度よりの繰越金	19,069,185	
2020年度よりの繰越金		20,866,273
年会費	3,855,940	4,278,395
正・学生会員	3,855,940	4,278,395
2018年度以前分	244,250	115,625
2019年度分	516,800	209,250
2020年度分	3,094,890	419,520
2021年度分	-	3,534,000
賛助会員	0	0
その他	3,050,063	2,750,063
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,500,000	2,500,000
科子	63	63
AJAMES販売代金	250,000	250,000
AJAMES掲載料	0	0
寄付	300,000	0
収入合計	25,975,188	27,894,731

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額／納入予定額および納付率

年度	未納額(円)／納入予定額(円)	前年度(2020年度)納付率
2017年度分		58%
2018年度分	185,000	40%
2019年度分	465,000	56%
2020年度分	690,000	71%
2021年度分	4,650,000	
合計	5,990,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率:予算策定年度の前年度決算(たとえば2021年度

予算であれば2020年度)における会費納付額÷

前年度予算に書かれている未納額×100

*2021年度予算に書かれている各年度(2018～2021年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2020年度における納付率(=2020年度決算における会費納付額÷2020年度予算に書かれている未納額)に5を足した値の1/100を掛けることによって算出している

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2020年度よりの繰越金	526,782	
本会計より繰り入れ	50,000	
科子	4	
第37回大会託児費用補助金		200,000
2022年度への繰越金		376,786
合計	576,786	576,786

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2020年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,703,679	
奨励金(片倉基金より)		200,000
振込手数料		440
科子	66	
2022年度への繰越金		1,503,305
合計	1,703,745	1,703,745

(単位:円)

支出	20年度予算	21年度予算
事務局費	2,318,000	1,700,000
アルバイト謝金	800,000	500,000
通信費	80,000	80,000
消耗品費	50,000	50,000
会議費	30,000	0
交通費	50,000	0
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	0	0
事務局移転費	0	50,000
事務局業務外部委託導入費	688,000	0
事務外注費	500,000	900,000
資料保管費	100,000	100,000
事業費	5,305,000	5,261,097
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	0
AJAMES編集費	300,000	300,000
同僚文校園費	300,000	300,000
同印刷製本費	2,100,000	2,100,000
編集委員会旅費	150,000	0
ウェブサイト改修費	200,000	0
データベース改修費	0	400,000
広報委員会事業費	500,000	500,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	0	200,000
AJAMES国内発送費	150,000	150,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	300,000	-
J-Stage公開費	200,000	200,000
公開講演会開催費	300,000	150,000
中東・イスラーム文庫DB更新費	150,000	150,000
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学会男女共同参画推進連絡会分担金	5,000	10,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
2020年度科研費残額返金	-	151,097
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	7,623,000	6,961,097
2021年度への繰越金	18,352,188	
2022年度への繰越金		20,933,634
総計	25,975,188	27,894,731

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2020年度よりの繰越金	994,941	
第37回年次大会補遺金		
本会計よりの繰り入れ	50,000	
科子	10	
2022年度への繰越金		1,044,951
合計	1,044,951	1,044,951

(単位:円)

【メール審議（2021 年 5 月 17 日～7 月 10 日）】

1. 2021 年 5 月 17 日 会費特例申請

- 会員 4 名から会費特例申請の承認があり、メールでの稟議の結果、5 月 19 日にこれを承認した。

2. 2021 年 6 月 2 日 新規入会、会費特例申請、強制退会

- 9 名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、6 月 4 日にこれを承認した。
- 会員 1 名から会費特例申請の承認があり、メールでの稟議の結果、6 月 4 日にこれを承認した。
- 6 月 1 日までに連絡・会費入金がなかった会員 10 名の強制退会について、メールでの稟議の結果、6 月 4 日にこれを承認した。

3. 2021 年 6 月 24 日 アルバイト等出勤簿の押印廃止、学会基金口座の変更

- アルバイト等出勤簿の押印廃止について、メールでの稟議の結果、6 月 28 日にこれを承認した。
- 学会基金口座の変更について、会員名義だった年次大会特別基金、年次大会時託児所特別基金、学会奨励賞特別基金の三つの口座を解約し、各基金用の口座を中東学会（任意団体）名義で三つ新設することに関して、メールでの稟議の結果、6 月 28 日にこれを承認した。

4. 2021 年 7 月 8 日 新規入会

- 4 名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、7 月 10 日にこれを承認した。

第 37 回年次大会報告

【プログラム】

第 1 日：2021 年 5 月 15 日（土） オンライン

公開講演会

「危機に対応する中東地域研究：9.11 事件から 20 年、「アラブの春」から 10 年、コロナ危機から 1 年」

鳥山純子 司会

末近浩太 開会挨拶

保坂修司（日本エネルギー経済研究所）「9.11 事件から 20 年：日本にとって 9.11 事件とは何だったのか？」

横田貴之（明治大学）「アラブの春」から 10 年：中東政治と中東政治研究の現在」

黒木英充（東京外国語大学）「コロナ危機から 1 年、スペイン風邪から 100 年：COVID-19 の先の中東と中東研究」

第 2 日：2019 年 5 月 16 日（日） ミーティング

企画セッション（1 セッション）・個人研究発表（6 部会）

＊氏名の右側の（ ）内は所属。J は大学院生を指す。

【企画セッション】

「文学をとおしてアラビア語を教える」

司会：榮谷温子（慶應義塾大学）

発表者： 近藤久美子（大阪大学）「日本文学作品のアラビア語翻訳について」

オーハン・エルマス（セント・アンドルーズ大学）「Teaching Arabic through the Nights（英語による発表）」

モハンマド・ファトヒー（東京外国語大学）「リーディング教材をコミュニ

ニカティブに：タウフィーク・アルハキームの作品を使った授業実践」

コメンテーター：ハルドゥーン・フセイン（東京外国語大学）

【個人研究発表】

第 1 部会

ハルドゥーン・フセイン（東京外国語大学）「History of the Fatwas of Takfir since the Abbasid Caliphate and its political influence: The Fatwas of Ibn Taymiyyah as an example」

堀井聡江（桜美林大学）「効果判決と有効判決—イスラーム訴訟法における既判力」

篠田知暁（東京外国語大学）「サード朝期グマール地方の「駆け落ち騒動」から見る山村の法学者」

平寛多朗（日本学術振興会）「チュニジアの中等学校におけるアラビア語教育」

ヘバッター・オマル（名古屋大学 J）「アラブの語り物をめぐる考察—ジェンダーの向こうで」

第 2 部会

モハンマド・ファトヒー（東京外国語大学）「Zoom 及び G Suite を用いたアラビア語のオンライン授業の取り組み」

竹田敏之（京都大学）「現代アラビア語における「標準」とは何か：クルアーン読誦流派の影響とその実証的考察」

アルモーメン・アブドラー（東海大学）「日ア語によるテキスト翻訳に見る異文化伝達とそのアプローチ」

村上武則（京都大学 J）「クルド語の定義とその操作」

岡崎英樹（四天王寺大学）「10 世紀のアラブ文法学における 5 分類」

榮谷温子（慶應義塾大学）「アラビア語エジプト方言の従属節におけるテンス・アスペクト」

第3部会

- 白谷望（愛知県立大学）「モロッコにおける分断的な政治領域の形成と再生産」
木戸皓平（東京外国語大学 J）「外部介入を招く外交のコンシステンシーとインコンシステンシー：2000 年以降のシリアを事例に」
ケイワン・アブドリ（神奈川大学）「イスラーム革命防衛隊」とイラン経済：「経済アクターである軍隊」の一事例」
徳永佳晃（東京大学 J）「イランにおける議会政治の再始動：第 1 次ガヴァーム内閣（1921-1922）の財政改革」
鈴木慶孝（大阪経済法科大学）「トルコの移民難民統合に関する批判的一考察：国民社会との「調和（Uyum）」をめぐる問いから」
小林和香子（独立研究者）「イスラエル人女性による平和運動「Women Wage Peace」の挑戦」

第4部会

- 濱田聖子（東京大学）「9 世紀における著書執筆の諸相：ジャーヒズを例として」
辻大地（九州大学 J）「アッバース朝期イスラーム社会における「異性装」」
成地草太（明治大学 J）「オスマン帝国におけるチェルケス人難民と地方住民との衝突：1860 年代後半のラズィスタン県知事文書にみるバトゥミ郡の事例」
矢本彩（明治大学 J）「オスマン帝国における 1909 年「3 月 31 日事件」および『火山』紙の政治的側面」
田中雅人（東京大学 J）「レバノン山地特別県のムスタファー・アルスラーンとその一族：19 世紀後半から 20 世紀初頭のドルーズ派有力者とオスマン朝」
坂田舜（九州大学 J）「オスマン帝国末期における諸民族女性観に関する考察」

第5部会

- 外山健二（山口大学）「ホイットマンとスーフィズム」
本間流星（京都大学 J）「植民地期南アジアにおけるスーフィズム思想：アシュラフ・アリー・ターナヴィーの存在一性論とイブン・アラビー擁護の論理」
福永浩一（上智大学）「イスラーム中道派思想家によるスーフィズム解釈」
早川英明（東京大学 J）「レバノンの共産主義者たちはキリスト教徒をどのように表象したか」
渡邊文佳（早稲田大学 J）「アッラール・アル＝ファースイーのマシュリク講演にみるモロッコ・ナショナリズムの主張」
岡崎弘樹（日本学術振興会）「シリアの作家は暴力とレイシズムの「反復」をいかに理解したのか？」

第6部会

- 幸加木文（千葉大学）「トルコの人権問題に関する議論の批判的検討」
小山友（千葉大学 J）「オランダの親トルコ政党に対する再評価：2021 年 3 月の下

院議会選挙における動向と選挙結果を中心に」

小島宏(早稲田大学)「ベルギーのムスリム若者における宗教実践と初婚タイミング」

望月葵(京都大学 J)「ヨーロッパにおけるシリア難民の社会的包摂：帰属とシティズンシップをめぐる」

李眞恵(イ・ジンヘ)(日本学術振興会)「中央アジアにおける多民族共存とエスニックマイノリティ：カザフスタンの高麗人(コリョ・サラム)を事例に」

桐原翠(日本学術振興会)「ハラール産業研究の視座と射程：イスラーム経済・イスラーム法・食の多文化共生」

【公開講演会報告】

本講演会は、本年は中東地域が関係する幾つかの出来事の節目の年であることを念頭に、これらを通して中東地域研究のあり方を再考する目的で開催された。登壇者・討論者共に自宅や職場から参加する Zoom ウェビナーの形式で実施され、比較的長いタイムスパンで中東地域研究を俯瞰的に捉えて議論する報告が並んだ。

各講演題は以下の通りである。保坂修司会員「9.11 事件から 20 年—日本にとって 9.11 事件とは何だったのか?」、横田貴之会員「アラブの春」から 10 年—中東政治と中東政治研究の現在」、黒木英充会員「コロナ危機から 1 年、スペイン風邪から 100 年—COVID-19 の先の中東と中東研究」。また、迎えた討論者は今井宏平会員と酒井啓子会員である。Zoom ウェビナーの形式は、参加への地理的制限がないため、全国さらには世界中から申し込みが見られた。事前申込者数は 298 人、当日参加者数は 240 人であった。また、今回初めての試みとして Zoom ウェビナーを録画し、大会後約二週間に限り YouTube で公開した。この間、視聴回数は 200 回以上となり幅広い視聴者を獲得した。

報告と質問から明らかとなったのは、中東地域で起きた数々の危機は、いずれも日本の中東地域研究を活性化させたという共通認識である。一方で、9.11 事件は安全保障問題と直結し「政策のため」の研究を助長する結果となったことや、特に「アラブの春」については事象そのものを取り上げて論じられることが少なく、関心を元になされた研究がそれ程多く見られなかったことが指摘された。コロナ禍の先を見据え、中東地域は複数の困難を抱えながらも社会として忍耐力を持っている点を認識しつつ、自然科学との連携やより学際的な研究に取り組まなくてはならない、中東地域研究はアジェンダも手法も様々に実践されうるのであり豊かさの現れでもあるだろう、とのまとめを持って講演会は終了した。

(佐藤麻理絵 大会実行委員・公開講演会担当)

【研究発表会場から】

企画セッション：文学をととしてアラビア語を教える

外国語で書かれた文学は、外国語教育／習得のための良き教材である。文学を読むことで、学習者は authentic な素材に容易に触れることができ、またその内容から、文化的要素について学ぶこともできる。しかし、このセッションでは、原語の文学を単

なる読解教材としてのみ用いるのとは違った、新たなアラビア語教育の方法を提示していこうと考えた。

近藤久美子会員（大阪大学）は、アラビア語の文学ではなく、日本語の小説のアラビア語訳を教材に用いる試みについての発表。正確さを求められる実用文や、映像による補いのある映画やアニメの字幕と、文学作品の翻訳との違いにも触れつつ、夏目漱石の『坊っちゃん』の翻訳について述べた。

オーハン・エルマス会員（セント・アンドルーズ大学）は、『千夜一夜物語』を、アラビア語会話まで含めたアラビア語教育に用いることについて、写本学、物語論、比較文学、様式（同物語のサジウ体ほかについて）、言語（レバント方言などの要素について）と、幅広い視点から考察をおこなった。

モハンマド・ファトヒー会員（東京外国語大学）は、エジプトのタウフィーク・アル＝ハキームの戯曲『ゴキブリの結末』を用いて、フスハーと口語の中間言語すなわち「第3言語」を教える実践例を報告した。彼の「第3言語」は、フスハーとしても口語としても読め、実際に良く用いられる実用的表現にも富んでいる。「第3言語」はSNSのアラビア語の読解にも有用であり、さらに、作品をとおして、アラブ社会の政治的・文化的背景の学習にも繋がることについても言及がなされた。

続いて、フセイン・ハルドゥーン会員（東京外国語大学）が各発表にコメントを加えた。例えば、近藤会員の発表について、自身も日本語の小説を翻訳中であるという立場から、アラビア語訳の読者はアラブ人であり、日本語から見て間違った訳も、ストーリーの展開上、許されるのではないかと、といった意見が述べられた。（セッション末尾で、近藤会員から、日本人のアラビア語学習者とアラブ人読者とのディスカッションの必要性に言及があった。）

最後に、参加者から、エルマス会員に、授業で用いる『千夜一夜物語』のバージョン（アル＝シルワーニーのカルカッタ第1版）についての質問と、イスラーム世界でときに禁書の憂き目に遭ってきた同物語のその内容面の問題についての質問とがなされ、活発な質疑応答時間となった。

（榮谷温子）

第1部会

ハルドゥーン・フセイン会員（東京外国語大学）の発表“History of Fatwas of Takfir since the Abbasid Caliphate and Its Political Influence: The Fatwa of Ibn Taymiyyah as an Example”では、タクフィール（不信仰者宣告）をめぐる歴史をアッバース朝時代から概観した上で、タクフィールに関するイブン・タイミーヤのファトワーを取り上げ、彼のファトワーを用いたタクフィールが現代のムスリム社会において流行していることを論じた。この発表に対して、現代のタクフィールに対するメディアの影響や、人権問題との関連などについて質疑がなされた。

堀井聡江会員（桜美林大学）の「効果判決と有効判決：イスラーム訴訟法における既判力」は、既判力、すなわち、確定判決が以後の裁判に拘束力を持つことが、学説法であるシャリーアに基づく有効判決（法律行為の有効性を確認する判決）と効果判

決（特定の事案における法の効果を義務づける判決）をめぐる議論にどのような影響を及ぼしたのかについて、マムルーク朝期のショーフィイーは法学者、タキー・アッ=ディーン・アッ=スブキーの学説を概観した。この発表に対しては、法学派の異なるカーディーが出した版権角既判力や、カーディーの判決が実際にどのように執行されたのかなどについて質疑がなされた。

（森山央朗）

篠田知暁会員（東京外国語大学）の発表「サード朝期グマール地方の「駆け落ち騒動」から見る山村の法学」は、17世紀前半にモロッコのフェズ北方に位置するグマール地方で活躍した法学者グラマーリーによる『訓告』を史料として、都市における学問研鑽が地方社会における知的エリートの関係にどのような影響を与えていたのかを検討するものであった。

知的エリート間の論争において、論敵を非難することを目的の一つとして執筆されたと想定される『訓告』は、フェズで活躍した師や他の知識人との関係を当事者でなければ窺い知れないような詳細な逸話を交えて記すことで、グラマーリーの知識人としての正当性や権威を示した内容ともなっている。論敵を非難し、そして自説が受け入れられることを想定して執筆されたと想定される同書は、グラマーリーのローカルなネットワークの詳細を豊かに示した貴重なものである。

質疑応答においては、当事者や関係者の間では関心をもたれるかもしれないが、後世に残りにくい本史料がいかなる経緯で今日まで残ってきたのかという点が問われるなど、活発な議論が行われた。

平寛太朗会員（日本学術振興会）の発表「チュニジアの中等学校におけるアラビア語教育」は、チュニジアの中等教育において用いられてきたアラビア語の教科書を資料として用い、国語教育の内容の変遷を丁寧に検討することで、ナショナリズムの変化を析出したものである。

教育制度の変遷と国語教育におけるアラビア語化の背景を明らかにしたうえで、1978年、1989年、2019年に刊行された教科書に含まれるテキストの内容を詳細に検討した。その結果、2019年に刊行された教科書においては、1978年のそれに比べて、アラビア語の古典に預言者ムハンマドや教友の手になるものが含まれていないこと、1989年に刊行されたエジプトの教科書で見られた古典が多数収録されていること、同時に、1978年の教科書に比して、古典の中にチュニジアに固有のものが含まれていないことなどが明らかになった。すなわち、今日用いられている教科書においては、「チュニジア的」「イスラム的要素」が減少しており、より広範な「アラブ人意識」と関連したテキストが「共通の文化的遺産」として選択されているという点が分析の結果、明らかにされた。

質疑応答においては、テキストの内容選定において、近年のチュニジアにおけるイスラーム主義の台頭などを考慮すべきではないかという点について疑問が提示されるなど、重要な論点が提起された。

両発表は、いずれも詳細な資料の提示し、明確な論点に基づいた充実した発表であつ

た。

(齋藤剛)

第1部会最後のセッションの報告者はヘバッター・オマル会員(名古屋大学・院)であった。オマル氏は「アラブの語り物をめぐる考察——ジェンダーの向こうで』と題し、長大な伝承物語『ザート・アルヘンマ王女伝説』を取り上げ、その中にみられるジェンダーを分析し、それが今日のフェミニズム研究によるアラブの家父長制論の構造とは異なるものであったことを明らかにした。オマル氏の報告に対し、この物語の成立時期や成立過程、それがどのように伝承されたのか等が問われ、また、物語と「史実」の関係性についての議論があった。

(後藤絵美)

第2部会

モハンマド・ファトヒー会員(東京外国語大学)は、Zoom と Google classroom を使ったアラビア語のティーチングツールの例を具体的に紹介した。教師の負担をいかに減らし、学生の集中力や交流を維持し、主に初級レベルの学生対象で、文字の導入や簡単な会話の手法、課題の出題と提出方法、成績の表示などについて情報共有がなされた。このツールを用いる場合は、授業の最初に Zoom で Google classroom の使い方等を学生に伝達することが大切であることが強調された。多くの大学がオンライン授業を行っている現在、時宜にかなった発表となった。

竹田敏之(京都大学)会員による、アラビア語の「標準」つまり「正しさ」の典拠としてのクルアーンが、現代アラビア語ではどのような規範性を持っているかを明らかにしようとした興味深い報告であった。クルアーンの読誦流派の歴史的・地理的背景および7あるいは10の流派の特徴を提示し、なかでもハフス流派が中心となっていることを示した。フスハーと呼ばれる標準的なアラビア語は動態的にとらえるべきであると結論付けた。フロアーからもコメントや質問が寄せられ、参加者との貴重な意見交換の場となった。

(鷲見朗子)

アルモーメン・アブドーラ会員(東海大学)は前年に引き続き、日ア両言語間の翻訳に関する発表を行った。アラビア語訳された日本文学作品等を題材に、異文化要素がいかなる方法によって訳出されているかを、とくに語彙レベルで分析した。目的に応じて異質化と受容化ふたつの方略をいかに用い、忠実性と結束性のバランスをどうとるかなどが論じられた。質疑応答では、文学作品の翻訳等であえて異質性を残すことが期待される場合、その判断をどのように行うべきかなどが議論された。

村上武則会員(京都大学)の発表は、クルド系諸言語(およびその隣接諸言語)のあいだの複雑な関係を詳しく紹介したうえで、「大同主義的」な政治的意図を達成するために、「クルド人」が(言語学的な分類とは独立して)「クルド語」をいかに定義しているかを論じたものだった。クルド語に関する専門的知識をもつ聴衆がどれほどい

たかは不明だが、情報量の多い発表は聴衆の関心を呼び、「定義」を行っている中心的主体や、使用文字、日本語（と沖縄語等）との比較などをめぐって質疑応答が活発になされた。

（福田義昭）

岡崎英樹会員（四天王寺大学）の発表は、10世紀の文法家イブン・サッラージュの文法書における文法項目の5分類（13カテゴリーある）を取り上げ、その分類が後代にどのように継承され、あるいは変更が加えられたのかについて、各用語の変遷を詳細に整理し、11世紀以降の文法学の標準化の過程を概観した。考察の結果の一つとして、13のうちマアリファ（限定）とマフウル（目的語および副詞的対格類）の5分類は比較的安定した枠組みとして継承されたことが示された。

榮谷温子会員（慶應義塾大学）の発表は、日本語の「～とき」とアラビア語エジプト方言の従属節（*lamma* および *wi-*）における静的述語と動的述語（状態、態度、知覚を表わす動詞、移動動詞、起動動詞、その他）のテンス・アスペクトを取り上げた対照研究であった。質疑応答では、起動動詞に分類した *libis*（着る）などの *bi*+未完了形は習慣以外に「～しつつある」の意味としても使われているのではないかという指摘のほか、用例の検証方法について、現地の母語話者を判断の拠り所とすることの妥当性に関する質問があった。

（竹田敏之）

第3部会

白谷望会員（愛知県立大学）は発表冒頭で「独立後のモロッコにおいて、いかにして分極的な政治領域が誕生し、またそれが維持されてきたのか」という問いを設定し、分極的な政治領域が形成されてきた歴史的背景や、それが繰り返し再生産されているメカニズムに関して検討を加えた。その上で、結論として、王党派政党の離合集散過程を見ると、一元的に「社会の多元性」を反映・利用したものではないという点、分極的な政治領域の形成・再生産・調整における王党派政党の重要性などが指摘された。

木戸皓平会員（東京外国語大学）は「シリア内戦はなぜ代理戦争化したか？」という問いを設定し、歴史的な背景の分析、そして今般のシリア内戦の展開などを検討した上で、バッシュール・アサド政権側の対症療法的傾向、および政策的の一貫性の無さが外部アクターの介入を招くことになったと指摘した。

（溝渕正季）

本セッションは、現代イラン政治を理解するうえで不可欠な二つの重要なテーマについての報告が行われた。ケイワン・アブドリ会員（神奈川大学）は、2000年代のイランの政治経済のマクロな構造を理解するうえで不可欠な革命防衛隊をめぐって、その経済活動について焦点を当て、1980年代末に道路建設公共授業を受注したことを皮切りに徐々に経済セクターでの活動を拡大させ、近年では民間部門の発展を妨害するほど巨大化してきた概要を明らかにするとともに、膨大な利権を独占した結果、変化

に対してますます強く抵抗する存在となっていることを指摘した。他方、徳永佳晃会員（東京大学）は、パフラヴィー朝成立前夜にあってイラン史上はじめて2年の会期を満了し恒常的な議会開催の嚆矢であった第4期国民議会（1921-1923）について議院内閣制の法制度面からアプローチし、合意形成型の議会と内閣に対する議会優位が制度化されることで短命な内閣とならざるをえなかった構造について明らかにした。

（黒田賢治）

鈴木慶孝会員（大阪経済法科大学）は、トルコ共和国が移民や難民の送出国から受入国となった現実に着目し、シリア難民の受入を事例に報告を行った。特に、トルコ政府によって提唱された「調和（Uyum）」という方針が、難民自身の自助努力に頼るような曖昧なものであったこと、さらにはエルドアン大統領によって一部のシリア難民に国籍付与の方針が発表されたことで、シリア人コミュニティ内部に分断が生じていることが批判的に分析された。

小林和香子会員（独立研究者）は、和平交渉が停滞した現在の状況において、イスラエルの女性らが展開する平和運動に着目し、その理念や具体的な活動について報告した。特に、対話の場を設けながら全国をメンバーらが巡る活動が、参加者によってどのように評価されていたのか、さらにはその活動がイスラエルおよびパレスチナ社会の双方においてなぜ疑念をもって受け止められているのかが明らかにされた。

（鈴木啓之）

第4部会

第4部会午前前半の部では、第1報告、濱田聖子氏（東京大学）「9世紀における著書執筆の諸相：ジャーヒズを例として」、第2報告、辻大地氏（九州大学）「アッバース朝期イスラーム社会における異性装」の2報告が行われた。

第1報告は、紙が普及し始めていた9世紀において、書物が如何に作製されていたかを、ジャーヒズの執筆活動から提示するものであった。多作の文筆家ジャーヒズは、書物を著す具体的な工程をしばしば自著に記録していた。これらの情報から、報告者は、ジャーヒズが紙を扱う専門家ワッラーク（口述筆記も担っていた）を利用し、執筆活動を行っていた様子を豊富な具体例とともに提示した。「紙」という新しい媒体に対応しようとする執筆者たちの苦勞の一端が窺える報告であった。フロアーからは、持病を抱えていたジャーヒズならではの執筆活動の事例を一般化できるのかとの疑義が呈され、また講義の場で弟子が師匠の口述筆記を行った成果であるアマーリー作品との違いについての質問が寄せられた。

第2報告は、イスラーム社会における「異性装」の扱いについて、アッバース朝期の諸史料に基づき、検討するものであった。報告者のこれまでの研究でも主張されているが、単純に「男性」と「女性」という二項対立ではなく、この異性装においても「非成人男性」というカテゴリを設け、検討することで、イスラーム社会における「成人男性」の権力性がより明示的になることを提示した。フロアーからは異性装が自発的なものか強制的なものかによって扱いが異なるのでは、また自発性・強制性の別は、

それを描く史料に左右され、結局「成人男性」に消費される対象としては差がないのではないか、などの議論が提起された。

(橋爪烈)

成地草太会員（明治大学）の報告は、オスマン帝国住民による難民支援運動の検討の一環として、オスマン地方社会の難民受入の傾向について、1860年代後半のバトゥミ郡における現地住民とチェルケス難民との関係が受入れから衝突へと変化した事例をもとに、地元住民と難民の間を取り持つ政府の難民定住政策の不備が、難民の地域への不適応と地元住民の不満を招き、両者の対立へつながっていった背景を明らかにした。「会 cem'iyet」、「支援 i 'âne」といった文書に登場する用語の実態などの論点をめぐってフロアと活発な議論が行われた。

矢本彩会員（明治大学）の報告は、オスマン帝国で1909年4月13日に青年トルコ人革命への反対運動として発生した「3月31日事件」をめぐり、事件首謀者の一人とされたヴァフデティが出版責任者を務めた『火山 Volkan』紙の政治的立場を、同年4月6日に発生したハサン・フェフミ殺害事件への反応、「分権制」への賛否、「自由」や「平等」の解釈という視座から分析し、「3月31日事件」の捉え直しを試みた。史料に登場する訳語の位置づけや解釈、「3月31日事件」前後の様々な他の事件や動きなどの問題に関して質疑応答がなされた。

(岩本佳子)

第4部会午後の部では近代オスマン史に関する二つの報告が行なわれた。田中雅人会員（東京大学）は、レバノン山地特別県の名望家アルスラーン家を取り上げ、地方社会の視座から近代オスマン支配を再検討した。在地に強い権力基盤を持たないが故に中央との関係構築を進めた同家の戦略から、従来「オスマン化」と見做されがちだった事象を「名望家政治」の文脈から捉え直すことが提起された。質疑では「名望家」や「名望家政治」といった概念の意味内容や研究史上の意義をめぐって活発な議論が展開された。坂田舜会員（九州大学）は1914年にイスタンブールで刊行された一雑誌の連載記事の内容を紹介し、「トルコ史」の文脈に回収されないオスマン女性史研究を試みようとした。質疑では19世紀後半を対象とした研究との接続の必要性や、連載記事の著者と目される人物の経歴についてコメントが寄せられた。総じて、報告者参加者共にオンラインによる学会参加に習熟した様子が窺われ、討論が非常に円滑に進行したのが印象的であった。

(藤波伸嘉)

第5部会

外山健二会員（山口大学）は、アメリカの著名な文学者ウォルト・ホイットマンの『草の葉』を取り上げ、スーフィズムが彼の詩にいかに関与されたのかを考察した。エマソンらと親交をもち、神秘主義的要素を含む彼の詩は、ロマンティズムにリアリズムを織り込むことを特徴とする。当時の欧米で広く知られていたハーフィズに影響を受

けつつ、「スーフィー」という語に言及するなど、スーフィズムの要素を創作活動に生かしていたであろうことが指摘された。質疑応答では、神智学など当時の思想潮流との関係性が討議された。スーフィズムのアメリカでの受容を理解するうえでも、非常に示唆に富む研究発表であった。

本間流星会員（京都大学）は、イブン・アラビーの存在一性論に影響を受けたターナヴィーを取り上げ、彼のスーフィズム理解を考察した。ターナヴィー思想は、植民地期の南アジアという状況下で醸成された。イスラーム改革の機運のなかで生じたイブン・アラビー批判に対して、彼はむしろイブン・アラビーを擁護する弁論を行ったことは特徴的である。質疑応答では、彼がウルドゥー語やアラビア語を用いながら議論を展開したことに関して、言語によって想定する読者が異なったのではないかという指摘もなされた。イブン・アラビー思想の近代における展開を理解するうえで、非常に示唆に富む研究発表であった。

（澤井真）

福永浩一会員（上智大学）の報告は、中道派として知られるイスラーム法学者ユースフ・カラダーウィーの著作・言説において、スーフィズムがどのように解釈され、また発信されてきたのかに光を当てるものであった。質疑応答では、現実にカラダーウィーがどの程度スーフィズムとかかわりを持っていたのか、またムスリム同胞団創始者ハサン・バンナーとの関係等に質問が集まった。

早川英明会員（東京大学）は、レバノン共産党の刊行物でマロン派勢力がどのように表象・形容されたのか、また批判を受けた側からどのような反論がなされたのか双方向的に分析することで、中東における宗派主義研究の新たな事例を提示した。参加者からは、左派勢力全体の盛衰に関する歴史的な分析の必要性や、レバノン共産党指導部の動員力に関するコメントや質問が寄せられた。

（吉川卓郎）

渡邊文佳会員（早稲田大学）報告は、20世紀中葉、モロッコ・ナショナリズム運動を主導したアッラール・ファースィー（1910?年-1974年）の言説について、彼がエジプトなどマシュリク諸国で行った講演記録を基に主張を整理し明確に示した。対仏関係だけではなく多面的な論点が提示されてきた近年のモロッコ・ナショナリズムの研究傾向を踏まえつつ、ファースィーがアラブの中でモロッコの地位の確立と連帯を目指す言説を構築していたことを指摘した。

岡崎弘樹会員（日本学術振興会）報告は、中東世界（イスラエル/アラブ諸国/政権外諸勢力）において「強者による暴力・抑圧」が当事者を入れ替えながら繰り返されていく事象を、（主に）シリアの知識人がいかに整理・解釈したかについて、1980年代～90年代と2000年代～2010年代の政治的背景の変化とともに「国家論/『表構え』VS『内なる国家』論」「国際環境論」「宗教宗派論」を軸とし、被害者意識によって自身の暴力を正当化する点も含めて多角的に論じた。

（柳谷あゆみ）

第6部会

幸加木文(千葉大学) 会員報告では、トルコにおける「人権」の語られ方について、おもに宗教保守派の言説に注目し検討がなされた。エルドアン政権によるイスタンブール条約からの脱退表明や 2021 年人権行動計画の発表についても言及され、政権が支持基盤である宗教保守派を意識した「人権」政策をとっていること、そして世俗派との乖離が顕著になっている点が指摘された。フロアーからは、トルコでのフェミサイドに関する統計の取り方などについて質問があり、内務省・NGO それぞれによる統計の存在が紹介されるなど、理解が深まる議論がなされた。

小山友会員(千葉大学) 報告では、オランダにおける親トルコ政党 DENK について、党内パワーバランスの変化が党の路線や支持者にどのような影響を与えたかが分析された。ここでは、党内組織の変化によって、党執行部でのトルコ系の影響力が増したことで、そして 2021 年 3 月下院議会選挙でモロッコ系の投票率が増加したことが指摘された。また、DENK とトルコのエルドアン政権の関係性はこうした変化を経ても継続的に良好であるとの見解が示された。

(岩坂将充)

小島宏会員(早稲田大学) 報告の「ベルギーのムスリム若者における宗教実践と初婚タイミング」では、ベルギーで 1994-1996 に実施された人口学調査のミクロデータから、特に、宗教実践と想定された諸実践を民族別・移民世代別(1世、1.5世、2世)で比較し、ムスリムの若者の初婚を促進もしくは抑制する効果をもつ要因が分析された。オーディエンスからは、「1.5 世代」を使用する意図や、アンケート原語に関する質問等が出た。ヨーロッパでの初期のムスリム実態調査であり、世代の変化や日本との比較にも分析を進めるとのことだった。

望月葵会員(京都大学) は欠席のため、報告なし。

(植村清加)

第6部会の午後の部では2本の報告が行われた。

1本目の李眞恵会員(日本学術振興会)の報告では、カザフスタンにおけるカザフ人、ロシア人、各少数民族の国民統合と多民族共存主義について、マイノリティである高麗人(コリョ・サラム)の視点からの分析が行われた。現地紙『コリョ・イルボ』(高麗日報)の記事分析と、政府主催の民族会議に代表をおくるカザフスタン・コリョ・サラム協会等への聞き取り調査を実施した結果、高麗人はエスニック・アイデンティティとカザフスタン国民としての市民アイデンティティとのバランスを保つよう努めていることが明らかとなった。報告に対してフロアーからは、高麗人をめぐる日常での言語と言語政策に関する質問がなされた。

次に桐原翠会員(日本学術振興会)からは、ハラール食品に関する報告が行われた。従来の研究は、市場規模や産業のあり方などイスラーム経済に着目するものや、認証基準などイスラーム法の研究に着目するものが中心であると整理した上で、第三の視

座として食の多文化共生が提唱された。報告に対してフロアーからは、この視座は研究者視点なのかそれともムスリム自身によるもの視点なのかという質問、ハラール食品の推進がかえってムスリムの生きにくさを招くのではないかといった質問等がなされた。

以上2本の報告が行われた本セッションでは、常時二十数名ほどの接続者(フロアー参加者)があった。

(福島康博)

【第36回年次大会を終えて】

第37回年次大会は、立命館大学(中東・イスラーム研究センター)を開催校として、オンラインで5月15日・16日に開催されました。昨年度の前回に続いて、今回もオンライン開催となりました。実行委員会としては、昨年9月の準備開始の段階からオンライン開催一本に絞ることで、本大会がオンサイトでの開催に比して何ら遜色のないものである、という姿勢を打ち出してきました。それは、研究報告をされる会員の皆さまが気持ちよく報告でき、それを気持ちよく業績としてCVに書けるように、という思いからでした。もっとも、今ではオンラインでの学会開催もニューノーマルとなり、両者の間に本質的な違いを見出す方も少なくなりつつあるのかもしれません。

1日目の公開シンポジウム「危機に対応する中東地域研究：9.11事件から20年、「アラブの春」から10年、コロナ危機から1年」には、オンライン開催のメリットということで、国内外からの多くの参加者を得ました。日本の中東地域研究、そして、日本中東学会がどのような努力を続けてきており、どのような課題を積み残してきたかを論じることで、学会としての役割やあり方を今一度見つめ直すための好機となったと感じています。参加者の会員の方々からは、登壇者の甘辛・硬軟織り交ぜた報告・コメントが醸し出す緊張感にハラハラした、といった(個人的には期待通りの)感想をいただくことができました。

2日目の研究発表は、オンラインということで応募者が少なくなるのではという一抹の不安もありましたが、蓋を開けてみれば、企画セッション1、部会6、登壇者の数も総計40名にも上り、非常に充実した陣容となりました。それぞれ最新の研究成果が披露され、活発な議論が交わされました。各セッション終了後に設けた20分程度の「立ち話タイム」も好評でした。

こうして、準備・運営にあたって下さった皆さま、報告者・参加者の皆さまのお力添えを賜ることで、本大会は全体として滞りなく開催することができましたが、懇親会を開催できなかったことだけが少々心残りではあります。オンライン開催とした以上、こればかりはもとよりどうしようもなかったわけではありますが、個人間の自由な交流を目的とした様々なオンラインサービスやアプリケーションが登場しており、会員間の懇親の機会や場を設けるための選択肢の幅が今後は広がっていくものと思います。

第37回年次大会の準備・運営にあたり、大会実行委員各位、特に大会事務局長の黒田彩加会員、事務局長補佐の池端落子会員には大変なご尽力をいただきました。また、

大会の特設ホームページの開設・運営、IT面でのサポートにあたりましては、北爪秀紀会員に本当にお世話になりました。それから、新旧理事の皆さま、保坂修司会長ならびに学会事務局、堀抜功二事務局長のご支援にも感謝申し上げます。そして、最後になりましたが、すべての会員の皆さまに心よりのお礼を申し上げます。

(末近浩太 大会実行委員長)

【大会決算】

第36回年次大会決戦

収入の部		支出の部	
大会開催費(学会本会計より)	400,000	ウェブサイト制作費	200,000
大会参加費(事前支払のみ 176名)	176,000	Zoomミーティング契約料	21,340
大会基金より補填	67,974	Zoomウェビナー契約料	44,224
錯誤入金	1,000	錯誤入金返金	1,000
銀行利子	1	ポスター制作費	20,000
		アルバイト謝金	224,750
		Web担当謝金	113,600
		口座開設手数料	1,100
		口座管理手数料	6,600
		郵送費	370
		振込手数料	11,990
		余剰金(年次大会特別基金に繰入)	1
収入合計	644,975	支出合計	644,975

託児所決算

収入の部		支出の部	
託児所特別基金からの拠出	23,710	託児所利用料金	3件：延べ8名(お子様の数) 23,160
		振込手数料	550
収入合計	23,710	支出合計	23,710

第8回日本中東学会奨励賞の選考結果

第8回日本中東学会奨励賞に関して、日本中東学会奨励賞選考委員会(黒木英充第18期会長、大稔哲也第17期会長、横田貴之『日本中東学会年報』第18編集委員長)は、2021年3月15日、選考委員会での審議の結果、該当作なしとの結論に至った。

第38回年次大会の開催について

2022年度の第38回年次大会は、早稲田大学戸山キャンパスでの開催が予定されております(早稲田大学文学部・大学院文化研究科「中東・イスラーム研究コース」主催、早稲田大学総合人文科学研究センター共催)。2021年後半にはコロナも一段落しているだろうから、翌春には一新された戸山キャンパスで、久しぶりに会員同士が再会を祝う…。昨秋に大会をお引き受けした時点のもくろみは、このようなものでした。しかしながら、感染拡大は予想以上に長引いており、大会を対面で行えるかどうか、

現時点では全く予断を許しません。「対面」とするか「オンライン」とするについては、おそらくギリギリの判断を待って、皆様にご報告することになります。また、日付についても、現時点では、第一候補が5月14日（土）・15日（日）で、第二候補が5月21日（土）・22日（日）となっております。こちらについても、決定し次第、直ちにご報告申し上げます。

では、不確定部分が残ったままで申し訳ありませんが、来春には戸山の杜で一人でも多くの皆様と再会を祝えるよう、心から祈念しております。

（大稔哲也 第38回年次大会実行委員長）

『日本中東学会（AJAMES）』編集委員会報告

- 37-1号は、7月中の刊行を目指して編集作業を鋭意進めております。
- 37-2号投稿論文の審査を行っております。投稿いただいた方には7月末頃に審査結果をお知らせいたします。
- 38-1号の投稿締め切りは12月1日です。欧文の特集を含め、皆様の御投稿をお待ち申し上げます。

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒108-8345 東京都港区三田 2丁目 15番 45号
慶應義塾大学 研究室棟 604B 錦田愛子研究室気付
『日本中東学会年報』編集委員会
E-mail: ajames-editor@james1985.org

（錦田愛子 AJAMES 編集委員長）

寄贈図書

【単行本】

西尾哲夫・東長靖（編著）『中東・イスラーム世界への30の扉』ミネルヴァ書房、2021年

Kenji Kuroda and Takumi Yamaguchi (eds.), *Research Source Guide for Museums in the Middle East III: Gulf Countries*, Center for Modern Middle East Studies at the National Museum of Ethnology, 2021.

会員の異動

【新規会員】

Morris James	筑波大学
岩田 紘宜	グローバル・ブレイン株式会社

松下 万弥	九州大学イスラム文明史学
渡邊 由紀夫	横浜市立大学
倉野 靖之	中央大学大学院
宇田川 彩	東京大学総合文化研究科
渡辺 卓弥	京都大学
洪 砺	大阪大学
山岡 陽輝	慶應義塾大学
九門 康之	公財) 国際通貨研究所
村田 七海	東京外国語大学
米田 優作	立命館大学大学院
清水 直美	内蒙古師範大学
毛利 奈知子	一橋大学
柳沢 崇文	
太田 絵里奈	東京外国語大学
阿部 優子	上智大学
狩野 希望	
鵜飼 桂子	早稲田大学
山本 真希	連合農学研究科
高安 海翔	早稲田大学 文学部
片居木 周平	東京外国語大学大学院
李 乘漢	神戸大学

【所属・連絡先等の変更】

小野 仁美	東京大学 大学院人文社会系研究科
長谷部 圭彦	東京大学 東洋文化研究所
後藤 絵美	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
藤井 千晶	日本学術振興会
奥 美穂子	神奈川大学
鶴見 太郎	東京大学 大学院総合文化研究科地域文化研究専攻
竹村 和朗	高千穂大学 人間科学部
溝渕 正季	広島大学 総合科学部
小澤 一郎	立命館大学 文学部
辻 明日香	川村学園女子大学 文学部史学科
辻田 俊哉	関西外国語大学 英語国際学部
臼杵 悠	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
澁谷 朋樹	公益財団法人 政治経済研究所
井堂 有子	日本国際問題研究所
山本 健介	静岡県立大学 国際関係学部
森山 拓也	気候ネットワーク

渡邊 駿	日本エネルギー経済研究所 中東研究センター
天野 宏紀	北陸電力株式会社
神田 惟	日本学術振興会（東京外国語大学）

【2020 年度末をもって退会した会員】

奥田 敦	茂木 明石	若松 大樹	横内 吾郎
Abdullah Baabood	齋藤 秋生子	川上 重夫	Bauden Frédéric
李 若非	蔣 旭棟		

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

アレズ ファクレジャハニ	苗村 卓哉	斎藤 正道
横田 吉昭	餅井 雅大	西舘 康平
高木 宗一郎	リーム・アハマド	ファトヒー モハンマド
林田 花枝		

事務局より

新事務局体制になり、3 カ月が過ぎました。この間、前事務局関係者には業務の引き継ぎで多くのご支援を頂きました。また、5 月 15 日の年次総会には多くの会員の皆様のご出席および事前の委任状のご提出があり、議事は滞りなく終了することができました。この場を借りてお礼申し上げます。

中東学会では今春より、従来の「日本中東学会会員名簿」に代わり学会ウェブサイト上で「マイページ」(<https://iap-jp.org/james/mypage/login/login>) の運用を開始いたしました。名簿には氏名、自宅、所属に関する情報が含まれます。「公開可」を選択した項目は、Web 名簿で検索・閲覧が可能となります。現在、基本情報以外は所属先名と部署名のみが「公開」、他の情報は「非公開」となっております。まだアクセスされていない会員の方は、一度ご確認下さい。

現在事務局はリモートワーク体制をとっているため、郵便物の確認にはお時間を頂いております。また各種お問い合わせ先については、学会ウェブサイト「事務局案内」(http://www.james1985.org/modules/about/index.php?content_id=8) をご覧下さい。なお、2021 年 8 月 11 日～24 日まで夏季休暇による閉室を予定しております。ご不便をおかけいたしますが、よろしくお願い申し上げます。

(堀抜功二 事務局長)

編集後記

今年度より NL の編集を担当することになりました青山弘之と申します。至らぬ点もあるかと思いますが、任期が終了するまでの 2 年間、どうぞよろしくお願いいたします。

(青山弘之 ニューズレター・書記担当理事)

日本中東学会ニューズレター 第 163 号

発行日 2021 年 7 月 31 日

発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒104-0054

東京都中央区勝どき 1-13-1 イヌイビル・カ
チドキ 10 階

(一財) 日本エネルギー経済研究所 中東研
究センター内

E-mail: james@james1985.org

<http://www.james1985.org/>

郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096

(ニホンチュウトウガクカイ)